CROSS TALK

リサイクル業界が、持続可能な世界をつくるリーダーになる。

PROFILE

株式会社イボキン
代表取締役
高橋 克実
Katsumi Takahashi

PROFILE

株式会社中特ホールディングス
代表取締役
橋本 ふくみ
Fukumi Hashimoto

廃棄物収集運搬業をはじめ、中間処理、リサイクル、解体業、遺品整理事業などを手掛ける5社からなる中特グループ。「生活環境革命で人々を幸せにする」を使命として、生活環境のお困りごとの解決に取り組んでいる。経済産業省・中小企業庁選定「がんばる中小企業・小規模事業者300社」にも選出されている。

出会いが生んでいく、新しく大きなビジネス。

高橋：橋本社長は、イボキンも参画している、リサイクラー企業同士が協業していくプラットフォーム「ROSE」（ローズ）の仲間です。イボキンとは解体事業での協業も増えています。

橋本：初めてお会いしたのも、その「ROSE」の提携調印式でしたね。その時、高橋社長が、今、高度成長期に造られた建物や道路などのインフラが老朽化し更新時期が来ているので、解体事業には大きなニーズがある。一方で、解体業界は未成熟でイボキンさんは解体事業のゼネコンみたいな立場になりたいとおっしゃいました。

高橋：中特さんは、遺品整理などの仕事もされていて、持ち主のいなくなったお住まいをどうにかしてほしいという話があると聞いて、それなら、解体事業があればお客様のお役に立てるのではというお話もしましたね。

橋本：それで、私も解体事業に興味を持ちまして相談したところ高橋社長がいろいろ教えてくださるということで始めたんです。住宅の解体から始めましたが、弊社のある山口県周南市は、周南コンビナートに大きなプラントがたくさんあって、そこを解体するには、ただ壊すだけじゃなく安全面やコンプライアンスがすごく問われますので、イボキンさんに教えていただかなくては絶対できないことでした。

そもそも、ずっとやってきたことがSDGs。

高橋：今、どの企業も共通して取り組まないといけないことに「SDGs」というテーマがありますが、中特さんは「17の課題」を据えてやってらっしゃいますね。

橋本：たしかに、SDGsのテーマにも通じる「17の課題」を掲げて取り組んでいますが、内容はずっと以前からやってきたことなんです。それは、世の中に必要とされなければ会社の存続に意味がないという私の信条からです。社会貢献すればするほど結果的に会社の発展につながる、まさにそれがそのままSDGsだと考えています。

高橋：地域と連携してさまざまな社会活動をしておられ見習うべき部分が多いです。ビジネスの視点で考えると「どう売上に貢献できるか」を重視してしまいがちですが、それだけでは、いけませんね。公共性の高い、社会に貢献できる姿勢や行動に興味や共感を持っていただいてはじめて、ビジネスのお話もいただけると思います。

橋本：そうですね、たとえば私たちは「フードバンク活動」を行っています。「賞味期限の切れていないものは捨てずに譲りましょう」という活動なのですが、私たちは廃棄物が多いほど売上が上がるのに、我々の売上がなくなり寄付のほうにいくわけですよ。でも、目先のことを考えたら損かもしれないけど、世界の潮流から見たらモノを無駄にしないことや必要としている人たちに食べ物を提供できる仕組みでもあると考えると、今、ちょっとした売上がなくなるのとフードバンク活動をやる意義と、どっちが社会的にプラスかって考えたらフードバンクのほうが絶対的にいいに決まっています。そういう風に考えてビジネスをしています。

循環型社会の真ん中にいる誇りを

高橋：リサイクル業界というのは、そもそも社会性、公共性という意義が大きく、やっていることは昔からさほど変わってないのですが、今、SDGsや気候変動といった課題解決の真ん中に出てこようとしてるんですよね。それは、すごいチャンスだと思っています。

天然資源を使うよりリサイクルしたほうが原料や材料にするためのCO_2も減らせます。とにかく、都市資源を回せば回すほど、モノを大事にすることと地球環境が良くなるということがちょうどマッチして本当にすごい産業が出来上がりつつあると思っています。そういう意味で、持続可能な世界をつくる一番のリーダーシップの担い手になっていくんじゃないかなと思っています。

橋本：そのように、私たちリサイクル業界は重要な役割を果たしていくわけですから、私は、この業界をもっと誇りを持てる仕事にしていきたいです。以前、北欧に視察に行った時、リサイクルの現場で働いている人たちがものすごくかっこよかったんですよ。最初、白人で背が高いからかっこよく見えるのかなと思ったんですが（笑）、実際、話をしても「社会のために、こんなに俺たちいいことやっているんだぜ」っておっしゃったのが印象的でした。日本もそうならなければいけない、5年先、10年後先に、花形系の職業にしたいと思いますよね。

発信力を高めていく ブランディングの価値

高橋：今、お話ししているこの本社オフィスも、とても瀟洒な雰囲気で、明るく快適でとても気持ちいいです。こういう働く環境の改善も、とても大切ですね。

橋本：ありがとうございます。この新社屋は昨年から運用しています。元々は、手狭になった旧社屋の転居を考えていまして、コスト的にも社屋の建設は考えていませんでした。でも、ただの事務所だからもったいないのであって、仕事だけの単なる事務所に終わらせないものにしたらいいじゃないかと思い付いたんですよ。そこで、事務所空間をイノベーションを起こせる場所にしたいと考えました。働く場所はフリーアドレスにしていて、実際、毎日違う人とのコミュニケーションが生まれていくようになっています。また、外観は、ほぼガラス張り、太陽が出て沈む方向や季節ごとの風も計算して、なるべく電気代を使わないっていうのを考えて設計されています。広くとったオープンスペースでは、金融機関との合同セミナーやキッズ向けスクールなども行ったりして、会社のいろんな可能性を探る試みを実践できる場になっています。

高橋：働きやすさや働く楽しさというものも実感できる環境ですね。弊社でも先日、新しい試みとして「ファミリーデー」を開催しました。お父さん、お母さんが働いているところを子どもたちに見てもらおうと企画しまして、社員、家族もあわせて200人以上が来てくれました。プロジェクトチームを立ち上げて意見を出し合って、ご家族にイボキンの会社のことを楽しみながら理解してもらえるようなイベントをしたんですよ。実際、いつもお父さんが動かしているトラックの試乗とか、バスを解体してショーのように見せたりとか、全部のイベントをまわるスタンプラリーもしたんですね。ご家族の喜んでおられるのを見られましたし、社員も誇らしげでした。

炭素の排出量を デジタル技術で一元管理

橋本：今後は、どういった事業を考えておられるのですか。

高橋：デジタル技術を駆使したエンジニアリング企業にならなければいけないと思います。これまでのように扱う廃棄物やスクラップが増えれば売上が上がるという物量に頼るだけではいけないと考えています。天然鉱山ではなく、建物やインフラに眠る資源を「都市鉱山」と呼んでいますが、その都市鉱山から出る資源の開発から処理、再資源化、出荷までを高度なデジタル管理のもと一貫して行うことを考えています。それができれば、カーボンニュートラルに向けての排出炭素量を廃棄の分まで含めて定量化して明確に提示できます。これは、解体から、産廃、再資源化、最終処分までをひと通りできるイボキンだからできることです。まさに、新しいスローガンである『資源の一生に、夢と責任。』を実践する事業として、認知、理解されていくようにしたいと考えています。

橋本：カーボンニュートラルといえば、私は新エネルギーにも着目しています。山口県のコンビナートが並ぶ海岸沿いには、多くの風力発電のための風車が多く設置されておりますが、高橋社長のほうでは風車の解体も手がけられていますよね。

高橋：風車も更新時期が来ているものが多くあり、昨年、洋上の風力発電設備の解体を手がけました。太陽光発電も含め、新エネルギーに関連する設備は、これからどんどんリプレイスの時期がきます。

橋本：ここ山口県の風車の解体、それにコンビナートのプラント解体も、お互いの強みを生かして、何かまた新たなものができれば面白いと思っています。経営者として、ああいうことをやりたい、どうしたらいいんだろうって思いますが、こうして先に志がご一緒の方と出会ってお話をしているうちに、じゃあ、これ一緒にしようっていう方がうまくいくような気がしています。

高橋：その通りだと思います。お互いの発展、業界の発展のためになることはもちろん、時代が求める持続可能な社会を創っていくことに貢献するために、これからも切磋琢磨していければと思います。本日はありがとうございました。